

人工内耳の両耳装用とろう学校進学を決断した母親の心理

荒木 友希子

（金沢大学人文学類・子どものこころの発達研究センター）

近年、海外では、重度感音性難聴に対する両耳の人工内耳装用が広く行われており、片耳装用に比べ、騒音下での語音聴取の成績や方向感の向上が報告されている（Litovsky, Johnstone & Godar, 2006）。一方、日本では、人工内耳手術が普及したものの、両耳装用はまだ検討がはじまったばかりであり、保険システムも整っていない。しかし、言語獲得期の子どもを持つ親にとって、両耳装用による聞こえのよさがもたらす効果の重要性は十分に承知していることであり、二度目の手術を迷う親も少なくない。本研究では、聴覚障害を持つ子どもに対して、一側目の人工内耳手術を受けた2年後に二側目の手術を決断し、地域の幼稚園からろう学校小学部を選択した母親に対してインタビュー調査を実施し、両耳装用とろう学校という一見矛盾した母親の心理について検討をおこなった。

◆ 方法

【手続き】 二時間程度インタビューをおこなった。インタビュー内容は調査協力者から事前に許可を得た上でボイスレコーダーに録音した。**【調査協力者】** 地方の聴覚総合支援学校小学部1年に在籍する人工内耳装用児（6歳、男児）の母親。本児以外の家族はすべて健聴。本児、母、祖父母の4人家族（父とは別居。月1回面会）。生後3ヶ月から補聴器の装用開始。2歳直前に一側目の人工内耳手術を実施。3歳から地域の幼稚園へ通う。二年後の年長の時に二側目の人工内耳手術を実施。平均聴力レベルは右耳105dB、左耳95dB。人工内耳装用閾値30dB。

◆ 結果と考察

【障害受容】 はじめは「信じられない」、「どうして」、「やっぱり」との思いが交錯。妊娠中に精神的ストレスを強く受けたことがあり、そのことが障害の原因なのではないかと自分を責めた。**【幼稚園】** 術後のリハビリは順調に進み、上手におしゃべりができて発音もきれいだったが、親子間のコミュニケーションに大変な難しさを感じていた。はじめて行く場所で見通しの立たないとかんしゃくをおこし、どうやって対処したらよいかかわからず、困る事が多かった。心の内面をどのようにやりとりしていけばよいかかわからなかった。幼稚園では加配の先生はつけてもらえなかった。幼稚園の先生は「周りの子どもと同じ行動をとれているから大丈夫。おしゃべりが上手なので心配ない。」とのこと。自分は本児とのコミュニケーションの難しさは耳が聞こえないせいだと思い込んでいたかもしれない。登園を嫌がることも多かった。「おしゃべりが上手なんだから、わからないところがあったら、先生に聞けばいい」と本児には話していたが、本児は反発していた。本児にとって安心して行ける場所ではなかったのではないかと、今振り返ると思う。**【両耳装用を決断した経緯】** 本児は年長になってから「自分は、人と違うけれど、自分は聞こえる人だ」と言うようになった。聞こえるろう者として生きていくことを考えた時、聞こえに余裕を持って生きていられることが大切ではないかと思った。聞こえる人と聞こえない人の狭間で生きていくには、もうちょっと聞こえの部分の底上げしてあげた方がよいのではないかと、もっと聞こえることで分かることが増えるならばした方がよいのではないかと考えた。「補聴器の方も新しいお耳にする？」と聞いたら「いいよ」とのこと。もっと聞こえるようになりたい様子だった。両耳装用で変わることもあれば変わらないこともある。ろう者であることに変わりはないが、音源定位ができたり、かすかに聞こえる泣き声がかきこえたりすると「どうしたんだろう」と考えることができるようになった。**【ろう学校小学部を選択した経緯】** 両耳装用とろう学校ははじめからセットで考えていた。聞こえておしゃべりができると言語力は違う。ろう学校で読み書きの力をきちんとつけて欲しいと思い、ろう学校を選んだ。学ぶことの楽しさは知って欲しいと思っているが、学校に限らず、いろんなところで楽しいことを見つけて欲しい。今はコミュニケーションに難しさを感じなくなり、落ち着いている。今の学校では聞いて分かる事が増えた。聞こえる人と聞こえない人の狭間にいようが何であろうが、堂々と自分自身を生きていくしか道はないので、そう思えるようになって欲しい。**【考察】** 本研究の調査協力者である母親は、聴覚障害教育について非常に熱心に勉強し、幅広く情報を収集していたことから、かなり早い段階で両耳装用の決断が可能となったと思われる。また、本児には学校だけではなく地域でのスポーツ活動などさまざまな体験をして欲しいという明確な希望を持っていたことから、小学校の進学に際してろう学校を選択したと推測される。